

緑爽会会報 No. 143

2016年4月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

代表を退くにあたって

松本 恒廣

1995（平7）年9月に発足した緑爽会は21年目を迎えました。当初、自然保護委員会を退会せざるを得なくなった会員が集まって同好会として発足したのが切っ掛けです。国見利夫氏が初代の代表、次いで近藤緑さん、いつの間にか私となったが齢80となったこの機に引退させて頂くことにしました。慣例？に従い次の代表は自然保護委員会委員長として活躍された富澤克禮氏にバトンを渡すことにしました。当会もこれ迄山行や講話を拝聴する等、毎月の例会を通じて独自のクラブライフが楽しめるようになってきたと思っています。又、近藤さんが長い間手掛けられてきた会報も大きく寄与していました。昨年6月、事務局体制が変わったのを機に会報もリニューアル。幸いにも好評でホッとしました。

私も1972（昭43）年関西支部で入会以来、44年目を迎え、この間、自然保護委員会、同担当理事、百年史編纂委員会、そして緑爽会と過ごしてきましたが、この辺で会務から退きたいと思います。緑爽会の今後に期待します。これ迄のご支援ありがとうございました。



《報告》

2016年度緑爽会総会

開催日：2016年4月12日（木）

出席者：山本良子、梨羽時春、松本恒廣、関塚貞亨、里見清子、渡部温子、川嶋新太郎、平野紀子、鳥橋祥子、樋口公臣、中澤喜久郎、島田稔、福原サチ子、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、小泉義彦、西谷隆亘、石塚嘉一、荒井正人、小原茂延（23名）



撮影：小泉義彦

これまで5月に行ってきた総会であるが、今年から4月開催となった。

冒頭15年度の事業報告及び会計報告に続き16年度事業計画案、予算案が松本代表と渡部会計担当より説明され、いずれも承認された。

また長年にわたり代表として緑爽会の運営に尽力されてきた松本代表が退任されることとなった。次代に譲る形で新年度は富澤さんが代表となった。

富澤さんは新任にあたり「自分は強力なリーダーシップはないが、緑爽会の歴史を汚さぬよう皆さんのご協力を得て運営していきたい」と挨拶され、引き続き茶話会の乾杯発声をされた。

茶話会では、自然保護委員長らしく川口さんが「鹿肉ジビエ料理」を提供してくださった他、テーブルにはみなさんが手土産にお持ちくださった日本酒・ワインが林立し、おもたせでいただいたお菓子や漬け物などが所狭しと並んだ。

飲むほどに、お腹が満たされるほどに皆さんの口も滑らかとなり、お一人お一人から一言いただくことになると、山岳会入会の経緯や緑爽会入会の縁など「おっ！」とつい発してしまうような不思議な、そして記録に残しておきたくなるような出会いが語られた。茶話会お開きの後、さらにはほぼ半数が河岸を変えて二次会へと。ここでも談論風発、様々な語らいがあったようだ。

茶話会席上で関塚さんが、「本当のクラブライフという点では、JACは公益社団法人となつてのメリットが無いわけでは無いが、もはやクラブではない。緑爽会こそが会員中心のクラブだ」と話された。富澤さんが皆さんの協力を得て、と話されたように、活発な会員の発言や行動があつてこそクラブ活動があるのだと思う。富澤船長率いる新緑爽会丸の船出である。乗組員みんなが持ち場を守って海原を航海して参りましょう！（記録：荒井正人）

・近況報告（返信ハガキから）

山口節子： いつもありがとうございます。年相応に元気にしております。

芳賀孝郎： 3月、5月は上京しますが、4月は残念ながら欠席です。山スキーを相変わらず楽しんでます。皆様によろしく

山本良子： 昨年に続いて四国の島めぐりをしてきました。直島、犬島、豊島です。

五十嶋一晃： 妻の介護があり欠席します。『山岳』第111年に「山名考—黒部源流域の別称をめぐって」と題する20頁余りのレポートを投稿します。

梨羽時春： 私の大学山岳部が10年間廃部でしたが、去年から体育会加盟になり部室も出来て忙しくなりそうです。

小西奎二： 2011年8月脳卒中になりました。はるかな山の生活です。

関塚貞亨： 寒いうちは猫のように家にこもったままで過ごしていました。春になり、ぼつぼつと動こうと思っています。果たして元気に歩けるかどうか少し心もとない気がしています。

吉田理一(越後支部)： 今シーズンも「駒の小屋管理人」と尾瀬ガイド協会「認定ガイド」として活動します。

堀井昌子： 元気にしております。

高辻謙輔(越後支部)： 第32回全国支部懇談会を越後支部で担当、実行委員の一人として準備に携わりました。緑爽会からも多数のご参加有難うございました。総会の盛会を祈念しております。

- 平野紀子： 4月早々、札幌行（JAC北海道支部植田惇慈会員の1周忌）、戻って運転免許書き替えの講習会。山のシーズンも始まります。いつも会報他ありがとうございます。
- 森武昭： 松本さんから紹介されて4月から加えていただくことになりました。新人ですが、よろしく願い致します。
- 奥野道治： 遠距離の外出（歩行）は無理ですが、努めて歩くようにしています。総会で皆さんにお会いできることを楽しみにしております。（満93才になりました）
- 鳥橋祥子(信濃支部)： 姪の子ども達の世話で忙しくしております。
- 中澤喜久郎： 元気にはしています。登山の歩行には困難になり町内会の雑務に追われています。
- 長沢洋(山梨支部)： 娘が進学で上京することになりさびしくなりました。
- 福原サチ子： 返信が遅くなり申し訳ございません。
- 樋口みな子(北海道支部)： いつも楽しみに読んでいます。遠方で、山行にご一緒できないのが残念です。
- 瀬戸英隆： 81才になり体力減退！ 我乍らまさか！の毎日 でも山へ行くとしゃきっと 不思議。
- 鎌倉淑子： 元気です。スキーはまだしています。山登りは3時間までしか歩けません。
- 西谷可江： お世話になります。どうぞ宜敷お願いいたします。
- 中村好至恵： 個展終了直後で残務があるため、申し訳ありませんが欠席させていただきます。
- 三枝海枝： 1人住まいになってみて、自由に動けないことに気がきました。この季節、桜やつつじ、水仙など庭での楽しみもありますが、雑草もたくさんで管理に少し疲れています。

3月山行 やくにみやま ずっこうやま 渋沢丘陵と八国見山・頭高山

島田 稔(リーダー)

3月17日(木)、やや薄曇りであったが、春らしいおだやかな一日、小田急線秦野駅に集合、荒井さん、中村さんから資料を貰う。

秦野七福神の「大岳院」と今泉湧水桜公園に寄るが、桜には一寸早いようだ。続いて江戸初期創建の「白笹稻荷神社」に詣でて、舗装された坂道を登るといよいよ渋沢丘陵である。表丹沢山塊と秦野市内が広く一望でき、富士もきれいに見えて気持ちが良い。

間もなく関東大震災で出来た震生湖に着いて小休止、釣り人ものんびり糸を垂らして静かである。無人の「福寿弁財天」は奈良の天河弁財天の分霊の由。

丘陵に戻り真栖寺、栢窪会館を経て八国見山入口の標識を南に折れて約10分、山頂南側の工事現場を見下ろす地点に到着。ここで中村さんから墓地開発がどんどん進み、オオタカ、ノスリ、オオムラサキなど貴重な動植物が急激に失われて自然環境破壊は不可避の実情について説明があった。山を削り、谷を埋める工事は急速に進んでいるが、南斜面側のため秦野市内からは全く見えず、一般市民の関心が薄いようだ。

山頂で昼食。八国とは駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・上総・下総・安房で、各地に関八州見晴台とか七国山・七国峠があり、昔は夫々極めて眺望がよかったと思われる。



再び丘陵に戻り頭高山を目指す。登頂は7人、途中で合流して渋沢駅に向かってひたすら歩く。途中、東京赤坂から沼津までの「矢倉沢往還」の標識があって驚く。(地元観光ボランティアの会で全7回完歩の企画がある由)

3時半渋沢駅北口の「食堂いろは」に到着。丹沢登山者愛好の食堂で土日休日は大きなザックが入口に山積みになる。何時もながらの気の利いたつまみと地酒に舌鼓を打つ。快い疲れと無事完歩に話もはずんで十分盛り上がった反省会となった。



後列左から:大島洋子、田井具世、平野紀子、荒井正人、西谷隆亘、西谷可江、島田稔、夏原寿一
前列左から:小原茂延、中村好至恵 (10名)

*参加者からの寄稿

平野紀子

のどかな風景の丘陵歩きの半ば、丸裸になった「八国見山」の南側区域の霊園工事の現場を眼にし、許可をした行政の長の権謀術策の姿を見たのは、私だけであろうか？ 利権以外のなにもものでもありません。小・中・高生の未来のある世代の人にこそ、1人でも多く現場を見て、間違っている事を学習してもらいたいと思いました。真白の富士山、美しい姿でした。打ち上げのお料理最高でした。

瀬戸英隆「思い込み—弘法山山系単独行の言い訳」

水無本谷、源次郎沢、セドの沢、勘七沢、金冷シ沢、葛葉川本谷。いずれも丹沢東面の沢登り対象の谷である。高校生の頃、毎日曜日これらの沢に挑戦していた。履物は“ワラジ”。塔ノ岳頂上直下は捨てられたこのワラジで埋まっていた。下山はいつもバカ尾根。

島田さん作成の山行計画書を一目見てすぐにこれらの事ごとが頭に浮かび、そうだあの頃降りた駅は「渋沢」だった。ホームからすぐに改札口になり右に折れ踏切を超えて入山口に向かっていた。そうあの渋沢駅、そこに行かれる。その時すでに私の脳には深く、深く渋沢駅が刻みこまれていた。

さて、その朝私は9時16分に渋沢駅に着いた。65年ぶりの駅は近代的な装いに包まれ、改札口は二階、南口を見れば震生湖方面の看板もあり間違い無しと安心。30分経過、誰も来ない。何故だ？自分が集合時間を間違えたんだなきっと。更に時間が過ぎた。誰も来ない。島田さんに電話(集合時間変わったんですか?) 2回掛けるも応答なし。不安。

そして何回目かに計画書を見る。えつ！ なんと集合は隣の駅「秦野」だ。なんと、なんと、すでに時計は10時40分を回っていた。大変だ、大変だ失敗だ、バカめ！ 10時45分の電車に飛び乗り秦野で下車、改札口へ。居るわけなし、誰も。

もう帰る。己に愛想を尽かして再び電車へ。帰るぞもう。鶴巻温泉の声にハッとわれに返り衝動的に飛び降りた。行くぞ。ピーク踏まずに帰れるか。

なれた道を歩く、農家の庭に鶏が放し飼い、畑にはA党の看板が。約20分後吾妻山に着く、こも弘法山の一部だ。コンビニで買ったおにぎりとお水を飲んで下山開始。帰路車中で荒井氏から電話が入った。「…これからどうされます?」、「もう帰ります」。

その2日後、JAC神奈川支部の設立総会に出席。議事は滞りなく進み原案通り可決承認され、最後に係りの方からの発表があった。

『記念山行は4月16日、鶴巻温泉から弘法山に至ります』と。 又かよ。

荒井正人

3月山行が渋沢丘陵と聞いてすぐに思い浮かべたのは八国見山南面の巨大霊園問題だった。

3年前の3月、中村好至恵さんから、この問題に関するシンポジウムが渋沢で開かれることを聞いて参加した。正直に言うと自然保護の視点もあったが、むしろ私の関心はパネリストの一人に、西上州を得意フィールドとする打田鉄一さんが出席するという点にあった。というのは、その時期は、独り住まいの母が急逝して葬儀を済ませた直後であり、実家に戻ったお骨を守るべく浦和に寝泊まりしていて、お墓のことを考えていたからであった。打田さんをご両親を散骨されている立場で話をされるとのことだった。最近は散骨や樹木葬など葬儀も多様化しており、お墓に拘らない方も増えてきている。私個人としても、人は最後は地球に帰るのが自然だと思っている。そこに興味があつたし、あのような計画は縮小なり形を変えることが可能なのではないかと思っていた。シンポジウムの後、独りで今回とは反対のコースを歩いた。時期も同じで、真っ白な富士と丹沢の斑雪模様を眺め、自然豊かな一帯だと感じたことであつた。

そんなことを思い出しながら3年ぶりに歩いたが、山腹が大きく削られ大型ダンプが走る様子を目の当たりにして愕然とした。いずれ誰も来なくなるような墓を、山を削り谷を埋めてまでして造る必要がどこにあるのだとの思いを強くした。もうその自然は戻らない。



小原茂延「渋沢丘陵八国見山の春」

丹沢には何度か行ったが、そうとう昔日のことであるし、小田急線の南側を歩くのは初めてであつた。埼玉から秦野市までと同方向の方もいないので、ダイヤがトラブっても大丈夫な頃合いに家を出た。お陰で早着し様変わりした北口から階下の小広場に出て、塔ノ岳を望んで改札に戻ると、本日のリーダー島田稔氏が地図、パンフ、八国見山の開発に係る説明書などを携えていて目が合うと、温顔をほころばせてくれた。

早春の願ってもない上天気恵まれてコースの大半が丹沢表尾根と相州大山を眺めての丘陵漫歩、ウメ、モモ、寒緋桜あるいは柑橘類の実越しに春雪豊かな富嶽も大きく迫る。

里山の良さは集落と畑、竹林、雑木林等と住まう人々が関わりあつて織りなす風景であり、訪れる

今年度分会費未納の会員は、1,500円を下記にお振込みください。

振込先： ゆうちよ銀行 記号番号 10000-18539041 リョクソウカイ

入・退会

入会者 森武昭(No.9620)

退会者 大森久雄(No.7311)、小西奎二(No.7897)、鈴木快信(No.9831)、山根繭(No.9671)

首都圏から遠く離れた地域にお住いの会員の皆様へ

普段、皆様とは例会や山行でお目にかかることも減多になく、ましてや、お話をする機会なども殆どありません。そこで、皆様から会報に記事をお寄せ頂き、お互いに知らない世界を知るきっかけになればと考えています。皆様のお手元には記事になるような話題が山のようにあると思います。先ずは故郷の山とか地元での活動などをお寄せ頂きながら枝を広げていきたいと思ひます。

原稿は手書きでも結構です。思いついたことをハガキに書いてお送りくださっても可です。文字数は特に決めてありません。因に、会報の1ページの文字数は約1200字です。写真やカットなども掲載します。下記宛にお送りください。

夏原寿一

住所録の充実

『住所録に携帯番号とメールアドレスが載っていると便利』という声があります。掲載しても差支えのない方は下記宛にご連絡ください。

夏原寿一



-----編集後記-----

『代表を退くにあたって』を拝読しながら、松本さんが国会図書館に通うなどして、3年かけて執筆された百年史の「日本山岳会と自然保護」を思い出した。改めて読み直してみたい。

「3月山行・渋沢丘陵」にお寄せくださった平野紀子さんの記事、迫力がある。

3月山行で下車駅を間違えてしまった瀬戸さんに、当日の「単独行」の原稿を、とお願いしたのは些か意地が悪かったか!? ま、そこは同期のよしみでお許し願おう。それはともかく、結びの「又かよ。」は笑える。(夏原寿一)

カット:中村好至恵 写真:夏原寿一

